

Title	いわゆる「瞬間動詞」について：ロシア語動詞アスペクト分析
Author(s)	林田, 理恵
Citation	言語文化研究. 2009, 35, p. 221-241
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6317
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

いわゆる「瞬間動詞」について

— ロシア語動詞アスペクト分析 —

林 田 理 恵

Так называемые *моментальные глаголы* до сих пор считаются глаголами, которые в силу своей лексической семантики не допускают актуально-длительного значения. Цель данной работы состоит в том, чтобы на основе обширного языкового материала выявить реальность употребления моментальных глаголов и проанализировать специфику их аспектуальных значений и функций. Они весьма разнообразны, к примеру, настоящее НСВ имеет специфическую функцию переноса действия в прошлом в момент речи, благодаря чему говорящий и слушающий, включаясь в процесс действия, синхронно наблюдают его и подвергаются его воздействию. Рассматриваются также случаи, когда в зависимости от контекста и ситуации одна и та же лексема по-разному проявляет свою аспектуальность и модальность.

キーワード：ロシア語動詞，アスペクト，「瞬間動詞」

1. 「瞬間動詞」とは

Апресян (1988:57-78) では「瞬間動詞」についての詳細な叙述がみられるが、古くは Маслов (1948:303-316) で動詞の語彙的意味とアスペクト的意味の相関性が分析され、そこで「現実的持続」の意味をもたない動詞群の存在が言及されている。さらに Vendler (1967) の動詞4分類中の «Achievement» 類の言及を経て、その後、数多くの研究がこの「瞬間動詞」と呼ばれる動詞グループについての分析を行っている (Булыгина 1982:40-85, Гловинская 1982:71-115, Мелиг 1985:227-249, Апресян 1988:57-78, Гиро-Вербер 1990: 102-111, Падучева 1996a:84-102, Падучева 1996b:103-121, Падучева 1998:332-342)。

これらの先行研究の多くで、「瞬間動詞」は「新しい状態への移行」「瞬時的1回動作」(Маслов 1948:315), 「時間幅をもたない動作」「瞬時に生起する動作」(Vendler 1967:102-103), 「きわめて限定された時間幅しかもたない動作」(Kučera 1985:123) を表す動詞として定義され、いずれも動詞が表現する言語外事実としての動作のありようそのものに依拠し

た内容となっている¹⁾。

しかしながら、動作が瞬間的であれ状態であれ、それが「瞬時に変化する」と判断するのはあくまで発話主体たる人間の主観であり、したがって、実際に生起する動作や状態そのものの時間幅の長さをいくら議論したところで、「瞬間動詞」として括られるところの動詞群の特徴を導き出すことはおそらくできないであろう。

一方でАпресян (1988:64-67) でも述べられているように

1) 動作の持続時間を表す時の状況語долго, недолго, час ...

2) 漸進性を表す様態の状況語медленно, постепенно ...

3) 動作の完成に要する時間を表す時の状況語за три минуты, за год ...

4) 位相動詞начать, продолжать, кончать, перестать 等²⁾

とは構文上のふるまいとして結合しがたい動詞群が存在するというのも、揺るがすことのできない事実である。

事態をいかに捉えいかにことばで描くかは、すでに述べたように基本的には発話主体たる人間の主観に依拠している。しかしながら、ことばを介して人間がコミュニケーションを図るためには、そこに何らかの傾向性、すなわち、ある特定記号が話し手、聞き手双方にある程度の共通イメージ——決して同一ではあり得ないのだが——を喚起するといったことがなければならないだろう。

「瞬間動詞」も、これらの動詞が喚起しうるイメージに何らかの共通の枠組みがあり、そのことによって上にみるような構文上のふるまいにおける制限というものが存在するのであろう。そして、そのイメージにおける傾向性によって、これらの動詞群がロシア語において不完了体として使用される時、そこでは他の多くの動詞の場合とは異なり、不完了体の主要な意味の一つである「現実的持続」の意味が表れがたくなるということが起こる。

本論では、先行研究で「瞬間動詞」として扱われてきた動詞群の不完了体のうち、意志性がないと判断されるものを抽出し、それらの動詞がどのような文脈・状況の中で、いかなる動作・状態を表現しているのか、実際のデータに基づき分析していく。

そして、従来「瞬間動詞」として一括りにされてきた動詞群について、とりわけその不完了体において一様でない構文上のふるまいが観察されること、したがって、そこではそれぞれの動詞が異なるパターンのイメージ喚起を前提として使用されていると推定できること、さらに同一動詞の同一語彙素であっても、使用される文脈・状況に応じてその表出する意味＝イメージにゆれがみられることを明らかにしていきたい。

1) Падучева (1998:332-342) においてのみ、「瞬間動詞」について「その描く事態に対して共時的視点をとることが不可能で、回顧的視点のみが可能な」動詞群との定義がみられる。共時的視点／回顧的視点についてはПадучева (1986)、林田 (2007:79-82) 参照。

2) Апресян (1988:64-67) ではこれ以外にも、対応の不完了体をもたない動詞がみられる、完了に要する時間を表す時の状況語と結合しない、起動相・継続相・終結相の動詞を派生しない、不完了体で現実的持続の意味以外にも一般的事実意味や能力を表す意味も表出しない、という点が「瞬間動詞」の特徴として挙げられている。これらの特徴は本文で挙げた4点も含めてすべての「瞬間動詞」で観察されるものではなく、各動詞でゆれがあるとも指摘されている。

こういった問題意識の背景には、ひとつには先行研究における「瞬間動詞」をめぐる議論に多くの混乱がみられるのも、異質なものを一括りとした考察にその原因の一端があるだろうという考えがある³⁾。

Vendlerの動詞分類中、瞬時変化動詞グループ (Achievement) の語彙リストについて研究者間でかなりのゆれが観察されることも⁴⁾、やはり「瞬間動詞」という括りの中に複数の異なる性質のものが含まれていることを示しているであろう。

そして、先にも述べたが、「瞬間動詞」についての理解が様でないことの根底に、「瞬間動詞」であるかどうかということの基準を言語外事実としての動作そのものの物理的な時間幅に求めてきたということがある。

Апресян (1988:61-63) ではМаслов (1948:303-316) で提起された基準に従ってより詳細な「瞬間動詞」のリストが作成されている。しかしながら、それら動詞群も「移動」「モダリティ」「出来事」といった単なる語彙的意味領域に基づいて分類されており、それらの分類が「瞬間動詞」群のそれぞれのアスペクト的意味のゆれ、構文上の立ち現れ方の異なりとどのように関連するののかについての説明はない。

「瞬間動詞」として一括りにされてきた動詞群に、アスペクト的意味・機能からみて不均質な、異なる特徴をもつ動詞が含まれているのであれば、それはとりわけ不完了体の使用においてその異なりが顕著に現れると考えられる。そして、そのような各動詞・不完了体のアスペクト的意味の異なりを明らかにするためには、単に辞書的意味に頼ることなく各動詞の使用をできるだけ多数の実資料において観察することが必要となってくるであろう。それらの実際の使用例において、問題とする動詞・不完了体で話者がいかなるイメージ内容を伝えんとしているのかが詳細に分析されなければならない。

そのような作業を積み重ねていくことで、イメージ内容として共通の傾向性をもついくつかの動詞群が形成され、そこでの語彙的な意味内容とそれらのアスペクト的意味との相関性が明らかになってくるものと思われる。さらには、同一の語彙素であっても文脈・状況の変化、それらに影響される話者の主観のありようの変化などにつれて、どのように、どの程度の振幅でアスペクト的意味もゆれ、ずれをみせるのかという点も「瞬間動詞」不完了体のアスペクト的意味・機能を考察する際には重要な事柄である。

3) 日本語学では、よく知られているように金田一 (1950) での「瞬間動詞」の分類が奥田 (1977) によって批判され、「瞬間動詞」という分類そのものを疑問視する向きも少なくない。金田一 (1950) は「瞬間動詞」は「テイル」で結果の残存＝状態パーフェクトの意味 (林田 2000:22, 2007:112-114) を表すとしたが、実はこのようなアスペクト的意味をもつのは「瞬間動詞」のうちの結果動詞—— 必須で一様な物理的变化結果をもたらす動作を表す動詞 (林田 2007:112, 117) —— だけである。一方、奥田 (1977) の「動作動詞／変化動詞」という2分類中の動作動詞とされるものにも、「テイル」で現実的持続相を表さず、動作パーフェクト (林田 2007:114-130) の解釈しかできないものが含まれる。動詞の語彙的意味とアスペクト的意味の相関性においては、限界性の有無がより本質的に関わっていることは明らかで、須田 (2003:140-170)、三原 (2004:7-32) でもその点が指摘されている。

4) Timberlake (1984:153-168) ではпочитать, проиграть等の継続相動詞が「瞬間動詞」類に含まれ、一方、後にみるようにумереть, начать, кончать等の動詞を「瞬間動詞」に含めるかどうかについては見解が分かれている (Булыгина 1982:67, Апресян 1988:60-61, Гловинская 2001:39-40, 136-137)。

2. [瞬間性] と [意志性]

[活性／非活性], [遠心相／求心相] という言語の最古層から存在したとされる区別を思い起こすとき (Климов 1977:83-114, 131-144; 山口 1995:83-112, 石田 1999:67-93, 108-119), [意志性] の有無という指標は [他動／非他動] といった指標よりもより本質的なものとしてことばの形式と内容との相関性に関与するのではないかと思われる。

現代ロシア語においても, 意志性指標とアスペクト的意味の関係については一再ならず検討されてきた。以下, これまでに指摘されてきた点で特に「瞬間動詞」との関わりが深いと思われるものについて挙げてみよう。

- 1) 同一動詞が異なる語彙素として意志的動作と非意志的動作の両方の意味を実現するとき, 非意志的動作を表す語彙素のみが [-意志性], [+瞬間性] という2つの指標を同時にもつ。

(1) *Смотри, он случайно разбивает окно.

(2) Смотри, хулиганы разбивают витрину. (Апресян 1988:66)

- 2) 以下のような偶然の非意志的動作を表す動詞・完了体は, <мочь+完了体・不定詞>の構文において可能・許可ではなく危惧のモダリティーを表現する。

заболеть (病気になる), забыть (忘れる), опоздать (遅れる), ошибиться (間違う), перепутать (とり違える), подавиться (のどがつかえる), потерять (失う), пролить (こぼす), проспаться (寝過ぎ), простудиться (風邪をひく), разбить (わる), сломать (こわす), упасть (落ちる), уронить (うっかり落とす), устать (疲れる) ...

(Караванов 2004:134-135)

- 3) 上記の動詞群は否定命令文で完了体が使用され, 警告のモダリティー表現となる。

(Рассудова 1968:112-114, Шатуновский 1996:343-345, Караванов 2004:132-133)

また, 日本語学においても三原 (1997:118-119) で動作動詞における意志性の有無が「テイル」形での持続類型の解釈に関与するということが指摘されている。

上のАпресянの指摘を待つまでもなく, 従来より [意志性] 指標と [瞬間性] 指標は一般に親和性が高いということがいわれてきた (Рассудова 1968:31-31, 39)。意志的動作とはメタファー表現でもない限り人間の動作に限られるわけだが, 少なくともその人間の動作に限っていえば, 状態動詞を除いて特殊な状況でもない限り, 非意志的動作が持続するというようなことは考えにくいのかもしれない⁵⁾。

「瞬間動詞」が表し得るアスペクト的意味に [意志性] 指標が関与している可能性が高いこと, また特に非意志的動作を表す動詞において, 上記2), 3) のように他の動詞群では観察されない共起制限が起こるとされる点などを考慮し, 本論では分析対象を非意志的動作を表す動詞に限った。そのことで, 1) で述べた「瞬間動詞」群におけるアスペクト的意味・機能の不均質性の検討に加え, 上記の共起制限が「瞬間動詞」全体について成立し得るのかどうかについても分析を試みる。そのような作業はアスペクト的意味とモダリティ

5) 動詞語彙分類と [意志性] 指標の相関性についてはПадучева (1996b:107) に詳しい。

一との相関性という点から「瞬間動詞」の特徴を抽出するという意味をもつ。瞬間性などのより具体的なイメージ枠としての各動詞のもつ語彙的意味指標と、より抽象的なイメージ枠としてのパースペクティブの側面が交差することで、特定のモダリティー解釈がいかにかに生成され、また文脈・状況によってそれらの解釈がどのようにゆれ・ずれをみせるか、具体的な言語現象を観察する中で考察してみたい。

3. 「瞬間動詞」のアスペクト的意味・機能

3.1 分析対象と資料

本論で分析対象としたのは、これまでの主要な研究 (Маслов 1948, Гловинская 1982: 71-115, Булыгина 1982:63-68, Апресян 1988:61-63, Падучева 1996a:84-102; 1996 b:103-121; 1998:332-342) で「瞬間動詞」と分類されてきた動詞⁶⁾のうち、意志性をもたない動作を表す次の26の不完了体動詞である。また、2.2) でみた不定詞の共起制限や未来、命令法の用法については対応の完了体についても分析対象とする。本論中、これらの動詞を「瞬間動詞」と呼ぶ。

давиться (のどがつかえる), заболеть (病気になる), забывать (忘れる), ломать (こわす), оговариваться (言い間違える), опаздывать (遅れる), опрокидывать (倒す, ひっくり返す), ошибаться (間違える), падать (落ちる, 落胆する), поскользнуться (足を滑らす, すべって転ぶ), проговариваться (口を滑らす), проливать (こぼす), пропускать (見落とす, 見逃す), простужаться (かぜをひく), просыпаться¹ (寝過ぎす), просыпаться² (うっかりこぼす), путать(ся) (とり違える, 混乱する), разбивать (わる, こわす), разрывать (やぶる), ронять (うっかり落とす), скользить (すべる), спотыкаться (つまづく), терять(ся) (失う, うろたえる), ударяться (ぶつかる, 陥る), умирать (死ぬ), ушибаться (ぶつけてけがをする)

各動詞の [意志性] 指標の有無については、接続詞чтобыを使った以下のような目的節との共起関係によって検証した。

(3) *Я забыла её фамилию, чтобы ...

ただし、上記の動詞のうちломать, опрокидывать, проливать, пропускать, разбивать,

6) 先にもみたように、これらの先行研究においても「瞬間動詞」の定義は一様ではなく、当然その分類においても違いがみられる。最も整理・分類された形で提示されているАпресян (1988:61-63) では1) 着点移動動詞a) 接頭辞при-, до- が付加されたприбегать, привозить, долетатьなど24動詞 b) -слать-, -являтьから形成されるпосылать, являтьсяなど8動詞, 2) 身体的, 社会的, 精神的变化 (特に獲得・喪失) を表すвспоминать, находить, забывать, терять, понимать, тратитьなど15動詞, 3) 成功, 失敗等社会的評価を表すпобеждать, проигрывать, успевать, опаздыватьなど8動詞, 4) モダリティーを表すвынуждать, запрещать, разрешатьなど8動詞, 5) 出来事の生起を表すполучаться, происходить, случатьсяなど6動詞, 6) 発見を表すзаставатьなど4動詞, 7) 社会・道徳規範の遵守/違反を表すнарушать, следоватьなど9動詞, 8) 人, ものの状態変化をもたらず動作を表す他動詞бросать, ломать, исключать, ронятьなど21動詞, 9) 物理的・知的・感情的のコンタクトを表すвстречать, касаться, посещать, толкать, трогать, ударятьなど37動詞, 10) 連続的な多回体動作のうちの1回動作を表すкачать, махатьなど10動詞が「瞬間動詞」のリストに入っている。

разрывать, скользитьなどは、次の(4)のように語彙素によって、さらには同じ語彙素の場合でも文脈・統語環境によってその表す動作の[意志性]が変化し、それに連動して[瞬間性]指標も変化する。そういった場合にはもちろん [意志性]、[瞬間性] 指標についてその都度の検証が必要となる。

(4) ... Он ощутил приступ нестерпимого бешенства, когда хочется все ломать, когда еще осознаешь, что намерен делать глупости, но это сознание только радует. «Лебеди»

(ヴィクトルは堪え難い怒りの発作にかられた。何もかも破壊したい気持ちなのだが、まだ自分が馬鹿をやろうということを意識している。その意識にこそ快感を感じるのだ。)

分析に使用した資料は文末に挙げている11作品、約78,800語であるが、表1に資料中にみられた意志性をもたない「瞬間動詞」の時制、法等による分布を挙げている。

表1 データ中にみる「瞬間動詞」の使用分布

	過去		現在		未来	命令法	不定詞	条件法	計
	反復	その他	反復	その他					
давиться	1	4					2		7
заболеть	1		2						3
забывать	12	1	12	3		16	9		53
ломать	3		3			1	2		9
оговариваться			1						1
опаздывать		1	1	1	1		2		6
опрокидывать									0
ошибаться		4	4	16					24
падать	25	4	12	9	2	1	7		60
поскальзываться		1							1
проговариваться		1							1
проливать(ся)				1					1
пропускать	2			1	1	2			6
простужаться	1								1
просыпать1									0
просыпать2	2		2	1			1		6
путать	2	3		7		1	5	1	19
разбивать							1		1
разрывать(ся)			1	1					2
ронять	2	2	1	1					6
скользить	2	1	1	1					5
спотыкаться	2			2			1	1	6
терять	6	9	12	8	4	3	21	1	64
ударяться	1						1		2
умирать		1		3			4		8
ушибаться									0
計	62	32	52	55	8	24	56	3	292

持続性をもたないとされる「瞬間動詞」の不完了体といえ、反復動作を表すものがその用例の大多数を占めることが予想される。しかしながら、実際の使用においては必ずしもそうはなっていないことが表からもわかる。表中、過去、現在について反復動作を表すものとそれ以外のものとして個別に数値を挙げているが、現在では反復以外の用例が全体の半数以上を占め、過去でも数値全体の3割を超えている。

未来時制、命令法、不定詞、条件法では各動詞のアスペクト機能が話者のモダリティーや文脈、発話をとりまく状況などと複雑に絡まりあい、それらに大きく依存しながらそれぞれの体の使用が決定されていく。後にみるように「瞬間動詞」不完了体の場合にも、単なる反復動作表示以外の多様な機能をそれぞれの動詞不完了体が担いながら、その時々々の状況に必要な情報喚起を行なっている。

以下、まず、反復動作以外のアスペクト的意味・機能を表現する「瞬間動詞」不完了体について、それらの表現が時制や法、文脈、発話状況等の違いによっていかなる異なり・ゆれをみせるのか、それぞれの場合ごとに分析する。さらに「瞬間動詞」不定詞、未来、命令法についてモダリティーとの相関性にも焦点をあてながら検討していく。

3.2 「瞬間動詞」不完了体現在

3.2.1 「内部記述」

「瞬間動詞」不完了体の用例でまず注意を引くのが現在での次のような用法である。

- (5) ... Или Рачкова чего-то недоговаривает? Черт, как же он об этом не подумал?

Стареть начал, что ли, хватку потерял, реакция уже не та, что раньше, очевидные вещи мимо глаз пропускает...

«Сон»

(ラチコワは何か隠しているのだろうか？ まったく、なぜ彼はこんなことに気づかなかったのか？ 歳なのだろうか、明らかなことを見逃すとは、腕が落ちて反応も鈍くなったのか)

- (6) ... Как он в общежитие-то пройдет?" — "Да-да, черт, — сказал горбоносый. —

Действительно, день не поработаешь — забываешь про все эти штуки".

«Понедельник»

(「…どうやって寮にもぐりこむんだ？」「そうだな、いまいましい」鉤鼻がいった。

「たしかに、明るいうちはむりだ。そのことをすっかり忘れているぜ」)

(5), (6) の文例では、下線の「瞬間動詞」不完了体現在はいずれも直前または最近に起こった動作を指し示している。ただ、ここではそれらの動作が単にあったということ伝えてはいるわけではない。そこでは発話の「今」の時点での話者の感情や評価 — 起こってしまった動作に対する遺憾な気持ち、驚きなど — が鮮明に描き出されている。Гловинская (2001:191-194) もこのタイプの不完了体現在の用法に言及しているが、Апресян (1988:68-71) では上のような感情表出型を含めて3つの下位タイプが紹介

されている⁷⁾。ひとつはいわゆる「実況放送」型 (настоящее репортажное употребление) (Апресян 1988:68, 金田一 1994:225, 工藤 1995:185) と呼ばれるもので、スポーツ中継などでよく使われる用法である。

- (7) Сюда с левого края приходит с мячом Блохин, обводит защитника и сильно бьет по воротам. Гол! (Апресян 1988:68)

(左サイドからボールをもって来ているのはブローヒン。ディフェンスをかわしゴールめがけて鋭いシュートを放つ。シュート！)

もうひとつは話し相手の過去の何らかの動作について、話者が評価に直接つながる意味の不完了体動詞・現在を使う次のようなタイプである。

- (8) Вы нарушаете правило. (あなたは規則を破っていますね。) (Апресян 1988:69)

これらの用法に共通するのは、いずれも発話時点以前の動作を発話の現在に抽出しているという点である。その意味で「先行－後続という2つの時間局面を結びつけて表現する動詞形態」としてのパーフェクトとして理解することも可能かもしれない。事実、Апресян (1988:71) では「瞬間動詞」不完了体のこのタイプの用法はパーフェクトの意味をもってると明言されている。そして、「先行－後続」のいずれの時間局面を重視しているかという点からみるならば、「実況放送」型は状態パーフェクトにより近く、感情表出や評価を表すタイプは動作パーフェクトと似た機能をもつとの判断が働くだろう (Маслов 1983:42, 林田2007:111)。

ところで、ロシア語ではパーフェクトの一般的な表現形式として状態パーフェクトを明示的に表現する分詞形受動構文以外に、完了体動詞過去——状態パーフェクト及び動作パーフェクト——、不完了体動詞過去——動作パーフェクト——も使われる。しかしながら、これら動詞過去を使ったパーフェクトが表出する意味・機能と上記の不完了体現在の用法を比べてみると、そこに決定的な差異が観察されるだろう。

まず第1に、状態パーフェクトでは発話時に眼前に物理的に展開している過去の動作の結果状態が描かれる。一方、「実況放送」型の用法では眼前に結果状態が存在しているわけではない。むしろあたかも動作そのものが聞き手の眼前で展開しているかのように描き出そうとする話者の思いがそこには感じられる。

また、動詞過去を使った動作パーフェクトは、発話時点の状況を何らかの意味で示唆する過去の動作に言及したり——完了体動作パーフェクト——、過去の動作を現在の事態の根拠・原因としてとり出す機能をもつ (林田2007:114-130)。過去の動作はあくまで「現在」を判断するための尺度としてもち出される。それに対し不完了体現在の感情表出型では、動作があたかも発話時点の「今」、生起しつつあるものとして表現されることで、話者の「今」

7) Бондарко (1971:150-153) でも現在時制の感情表出用法 (настоящее эмоциональной актуализации) について述べられているが、Апресян (1988:68-71) の場合とやや異なるのは、Бондаркоでは直前動作のみならず広く過去の出来事について、話者が何らかの感情・評価をこめて発話時にその出来事を取り出し、コメントするような用法が検討されている。工藤 (1995:184-187) では同様の用法が歴史的現在に分類されているが、本文中でも述べたように、これらの用法は歴史的現在用法とはそのパースペクティブという点において本質的に異なるという点には注意しなくてはならない。

現在のとらわれている感情、思いが描かれる。

このようにみえてくると、問題となっている不完了体現在のアスペクト機能では、「瞬間」や「持続」といった動作態表示ということを超えて、そこでは話者の事象に対するパースペクティブの異なりが表現されているといえるだろう。

「実況放送」型では、話者が事象の生起の中に身をおき、アクチュアルにその事象の変化、その中で複数の他の能動者の関与を刻々推移するもの、動的なものとして記述するという「内部記述」的な世界(林田2007:82-83)がまさに展開している。話者はそのようなパースペクティブをとることによって、聞き手に対しても同様の事象との一体感をもたせるという効果が生まれているのである。感情表出型においても、事象との一体感、進行中の動作の刻々の作用に身をゆだねているという描き方が話者の強い感情表明を可能にさせている。

また、特に評価型では、すでに起こってしまった事態をあたかも生起しつつあるものとして描くことで、まだ事態への働きかけ・変更は可能であるというサインを相手に与えている。そこではすんでしまったことに対する外側からの静的な評価がなされているのではない。あくまで現在進行しつつある事態の内側に話し手、聞き手双方が身をおいているものとして、相互の作用が可能な世界として相手に働きかけがなされているのである⁸⁾。

ところで、不完了体・現在での「内部記述」的なパースペクティブ表示というアスペクト機能は、不完了体を選択することだけで可能になるわけではない。確かに「内部記述」というパースペクティブ表示は不完了体の主要なアスペクト機能であるが、ただ不完了体の選択だけでそのようなパースペクティブを描くことが可能なのであれば、同じ状況ですでに完了している動作にわざわざ現在形を用いなくとも、不完了体・過去で用は足りるはずである。ところが、話しことばの展開において発話状況との関連で不完了体・過去が使用されると、そこで描かれる動作は不完了体・動作パーフェクト用法として、「現在の事態の判断材料としての過去の静的なひとまとまりとしての事実」という理解を形成させ、もはやアクチュアルな事象との一体感は消失してしまうのである。その意味で、まさに状況との関わりにおいて体・時制が一体感をもってその機能を現出させるとき、はじめて内部記述的パースペクティブの世界が完成するといえるだろう。

3.2.2 歴史的現在

- (9) — ... Помнишь, поди: сошли мы с парохода, я глаз боюсь поднять, на ровном месте спотыкаюсь. Помнишь? Так и было: на яр влезли, у меня нога за ногу запелась, я упада. Люди засмеялись, а мне гошней того, земли под собой не вижу. Ты понял, что мне страшно, взял меня за руку и повед. Приходим домой; ты говоришь: вот она,

8) Гловинская (2001:108-109) で Вы обижаете меня ≠ Вы обидели меня. における不完了体・現在と完了体・過去のそれぞれが使用される状況の違いについて、「不完了体・現在は(たとえば招待を断った人に対して一筆者注)まだ説得の余地があると話者が考えている場合に使われ、(…中略…)完了体は相手の拒絶はすでに動かしがたい事実、話者を侮辱したもののみなしている場合に使われる」という説明がなされている。

моя жена...

«Живи»

(「…あんだだっで覚えているはずよ。あたしたちが汽船から降りたとき、あたしは眼を上げるのが怕くて、平らな場所でつまずいちゃって。覚えているでしょ？ あたしったら、崖っぷちによじ登ろうとしたとき、足がもつれて 転んじやったの。村の人たちは笑い出したわ。それであたしは、ますます辛くなって、足下も見えないのよ。あんたはあたしが怕がっているのがわかったから、手をとって連れてってくれたわ。そして一緒に家へ帰って、『これがおれの女房だ』って言うのよ。…」)

歴史的現在については、これまでも数多くの言及がなされてきているので (Бондарко 1971:143-150, 223-234; Маслов 1984:82-84, 金田一 1994, Гловинская 2001:183-187), ここでは先の不完了体現在「内部記述」用法との違いということだけを見ていこう。

(9) では過去の出来事の回想が不完了体現在 (破線 —— 実線は本論で分析対象としている「瞬間動詞」非意志的動作を表す動詞) と完了体過去 (波線) によって語られている。ここでの不完了体現在のアスペクト機能は3.2.1でみたタイプとは根本的に異なる。歴史的現在では話者の視点は発話時点ではなく出来事時点へと移動しており、そこで展開される事態を外側から眺めるように時序的に追うという、本来は完了体過去がもつアオリストの機能を代替している。ここで時制としての現在が過去に代わって使われる理由についてはБондарко (1971:143-150), 金田一 (1994) に詳しいが、歴史的現在用法では先の「内部記述」的なパースペクティブ —— 直前の動作を発話時点にリンクさせながらアクチュアルに事態の内側から描く —— とは対極をなすパースペクティブが表現されているという点は強調しておかなくてはならない。

3.3 「瞬間動詞」不完了体過去・現在

3.3.1 状態

(10) ... Он пытливо замирал и, веря, что ошибается, не мог все-таки освободиться от недоброго чувства, что Таня - не та, за кого она себя выдает. «Живи»

(…彼は探るように息を殺していた。そして誤解しているのだと信じながらも、どうしてもターニャは日頃見せかけているのとは違う女のような気がしてしまうのだった。)

(11) ... Мысли Гуськова путались, терялись, он не знал, что делать. И оттого, что не мог ни на что решиться и тратил зря время, злился еще больше. «Живи»

(…アンドレイの考えは、混乱して、何をしたらいいのかわからなかった。そして何一つ決心がつかず、むなしく時間を費やしているということで、彼はますます苛立っていた。)

(10), (11) における「瞬間動詞」不完了体は、3.2の場合とは異なり目下の状態そのものを描いている。地の文で使われていることからわかるように、そこでは感情表明等のニ

ュアンスは感じられず、描写場面が不完了体によってクローズアップされ、そのときの状態が静的に描かれているのである。その意味で、先の2用法とは異なり不完了体の本来的なアスペクト機能による用法といえるだろう。したがって、この用法では時制は限定されず、上でみるように不完了体過去でもこの意味で使用される例は多い。

ошибаться, путаться, терятьсяが表す「間違っている」「混乱している」「うろたえている」といった目に見えない心的状態は、その開始ははっきりととらえられても、終了時点、状態の境目については一般にあいまいな認識しか成立し得ない。これらの動詞が表す事態は、一度起こればその心的効力が持続する限り、継続する状態としての認識を成立させるのだろう。そのような状態への認識が不完了体の使用をもたらすといえる。благодарить - поблагодарить (感謝する), возражать - возразить (反対する) などの心的状態・知的活動を表す動詞群が不完了体でパーフェクトの意味を表現するということは、すでに多くの研究で指摘されているが (Падучева 1996a:94-96, 1996b:116-117; Гловинская 2001:108-115), この現象についても同様の説明が可能であろう。また, терятьсяについては, 3.3.3でみるように派生元の терять (失う) がまったく異なるアスペクトの意味を表現することも興味深い。

3.3.2 事態変化の予想

- (12) « ... Или пан, или пропал. Ох, Стасенька, деточка, знала бы ты, как мне сейчас больно, сердце разрывается. Жалко Володьку, дороже дочери у него никого нет на свете. Ведь по святому бью, будь я проклят!» «Сон»

(「…アナスタシア, 私がいまどんなに辛いかわかってくれたら。心が張り裂けそうだ。ラールツェフが不憫だ, 一人娘のほかに大事なものは, やつにはないのだから。神聖なものをだしにするのだから, 私は呪われて当然だ!」)

- (13) ... Отдышавшись немного, он вскакивал и продолжал бежать, но все медленнее и медленнее. Когда он наконец увидел пылящую вдали длинную процессию, она была уже у подножия холма.

— О, бог... — простонал Левий, понимая, что он опаздывает. И он опоздал.

«Мастер»

(…幾分呼吸がもとにもどると, 彼は跳び起きて, 走りつづけたが, 速度は落ちるいっぽうだった。ついに, はるか遠くに, 砂埃をあげて進む長い行列を見いだしたとき, 行列はすでに丘の麓にさしかかっていた。

「おお, 神よ…」 マタイは間に合いそうにないことを悟り, 呻いた。そして実際彼は遅れたのだ。)

(12), (13) は「瞬間動詞」不完了体に特徴的な事態変化の予想を表現する用法である。ここでの接近のプロセス, 予想という心的状態は「現実的持続」のひとつのバリエーション

として不完了体によって記述される。この用法も不完了体の本来的なアспект機能によるもので、以下にみるように時制を問わず使用される。

- (14) ... Мокрец оказался тощим и легким. Он не двигался и, даже казалось, не дышал, и он не стонал, когда Виктор поскальзывался, но всякий раз его тело сводило судорогой. «Лебеди»

(…〈濡れ男〉は痩せていて、軽かった。男は身動きもせず、呼吸すらしていないように思えた。ビクトルが転びそうになっても、うめき声ひとつあげなかった。ただ、そのたびに男の身体がびくっと震えた。)

「瞬間動詞」不完了体が状況の瞬時的移行・変化を表す動詞として、反復の意味以外に移行、変化時点——それ自体は点としてとらえられるのだが——に向けての近接未来的な意図や予想の意味を表すことはこれまでも指摘されている(Маслов 1984:59-60, Падучева 1989:28-29, Падучева 1996b:113-116, 林田 2007:99-100)。そして、意図、予想といったこの用法におけるモダリティーの多義性は、[意志性] 指標の有無が関与することでそれぞれの使用において克服される。以下は [+意志性] の動詞による意図のモダリティーが表現されている例である。

- (15) О чем он думал тогда? Может быть, и правда в мечтах своих отправлял меня учиться в большой город? «Учитель»

(彼はあの時何を考えていたのでしょうか？もしかすると本当に私を勉強させに大都会にやろうと夢に描いていたのでしょうか？)

3.3.3 事態変化への接近

3.3.2の用法との関連で興味深いのは、不完了体動詞умирать(死ぬ)が次の例にみるように「死にそうだ」といった予想の意味をもつように思えるものの、「瞬間動詞」への分類についてゆれがみられることである(Булыгина 1982:67, Апресян 1988:60-61, Гловинская 2001:39-40, 136-137)。

- (16) И тогда спальня завертелась вокруг Степы, и он ударился о притолоку головой и, теряя сознание, подумал: «Я умираю...» «Мастер»

(するとそのとき、寝室がステパンの周囲に回転しはじめ、彼は側柱に頭をぶつけ、意識を失いながら、「おれは死ぬ…」と思った。)

умиратьは(16)のように予想の意味を表現する一方で、次の(17),(18)のように、単なる予想ではない実際の変化の過程をも表現する場合がある。

- (17) ... У титулярного советника Б. умирает жена, дети по очереди заболевают бронхиальной астмой. «Лебеди»

(B.九等官の家でも、妻が死にかかっており、子供たちも次々と気管支ぜんそくにかかっていた。)

- (18) Она была на собраниях всегда. И всегда - что-то записывала. Это было совершенно непохоже на остальных, которые откровенно умирали от скуки, ... «Сон»

(…あの女は父母会に毎回来ていた。そしていつも何かメモをしていた。他の出席者とはその点がまったく違った。他の出席者は退屈で死にそうだった。)

「死ぬ」という現象は、言うまでもなく生きている状態から死んだ状態への瞬時的変化として常識的にはとらえられるものである。しかしながら (17), (18) で表現されているように、「瞬時的変化の転換点への接近」のプロセスが存在するという認識によって、「瞬間動詞」不完了体では本来、表現されない変化の過程がумиратьという動詞不完了体によって描写されることになる。その意味でумирать - умеретьの体のペアはначинаться - начаться (始まろうとしている—始まる)、さらには「試み/到達・完成」という典型的なアスペクト対立を表現するとされるловить - поймать (つかまえようとする—つかまえる)といった動詞グループにつながるものとしての理解ができるかもしれない。

AOTコーパス (<http://www.aot.ru/search1.html>) での検索においても、次の (19), (20) のように медленно, постепенно といった副詞と共に共起する使用例が数多くみられ、こういったことから умирать が過程の観念を許容する動詞群に近いふるまいをみせることがわかる。

- (19) Между тем мать медленно умирала той же болезнью, от которой угасала теперь немногими годами пережившая ее дочь. (И. Гончаров. «Обрыв»)

(ところで母はその病でゆっくりと死を迎えていったのだが、同じ病気で今度はここ数年苦しんできた彼女の娘が死にかけていた。)

- (20) Мама тогда уже начала болеть, у нее было какое-то редкое заболевание, при котором в организме постепенно умирает все. (Г. Щербакова. «Армия любовников»)

(ママはすでに病に侵され始めていたが、それは珍しい病気で身体の内部ですべてが徐々に死んでいくというものだった。)

ところで、терять (失う)、забывать (忘れる) などは先にみた先行研究においても一様に「瞬間動詞」として分類されている動詞であるが、(21) のように不完了体で умирать と同じようにプロセスが描かれる場合がある。

- (21) Он погладил одеяло, дотронулся до простыни: она постепенно теряла тепло, холодела, становилась равнодушной. «Похождения»

(シーポフは毛布をなで、敷布にも触ってみた。敷布は次第にぬくもりを失い、冷たく冷淡になってゆく。)

動詞 терять は、具体事物を対象とする場合にはその動作は瞬時に変化するものとして通常は認識されるが、(21) の例のように「熱を失う」「若さを失う」など抽象的な性質等が対象となる場合には、その質的变化の過程をプロセスとして描くことが可能となる。

また3.4.2でも詳しく検討するが、терять, забывать は不定詞として位相動詞 начать, стать などとも結合し、そのことからこれらの不完了体が何らかの持続的プロセスを表現し得

るといことがわかる。

- (22) — Все очень неточно, — обратился к ней Борис. — Прошло около месяца, люди стали забывать детали. «Сон»

(「大体的ことしか分かりませんでした」と、ボリスがアナスタシヤに言った。「一カ月近くたっていますから、細かなことは忘れ始めているようです。」)

умиратьの場合は「瞬時的変化の転換点への接近」のプロセスが描かれていたが、(21)、(22)では変化そのものがすでに瞬時ではなく、あるプロセスを有するものとしてイメージされていることがわかる。(21)でпостепенноが使われていることもそのことを裏づけていよう。したがって、これらの動詞はвысыхать - высохнуть (乾きつつある—乾く)など、はっきりとした持続相／完了相のアスペクト対立を示す動詞グループにより近づいており、「瞬間動詞」群ではумиратьの場合以上に周辺の位置づけをもつものとして理解できるであろう。本論で検討している「瞬間動詞」群でこのようなふるまいをみせる不完了体に、上記のもの以外でзаболеть, падать, путать(ся)などがある。

3.4 「瞬間動詞」不定詞

3.4.1 мочь (можно)+「瞬間動詞」不定詞

2でもみたように「瞬間動詞」のうちの非意志的動作を表す動詞は<мочь (можно)+「瞬間動詞」完了体>で可能・許可の意味ではなく、(23)でみるように危惧のモダリティーを表現するとされる(Караванов 2004:134—135)。

- (23) — Дорогой мой, — задрезжал длинный, сверкая глазом из разбитого пенсне, — а откуда вам известно, что у меня ее нет? Вы судите по костюму? Никогда не делайте этого, драгоценнейший страж! Вы можете ошибиться, и притом весьма крупно.

«Мастер»

(「なあ、あんた」背の高い男はひびの入った鼻眼鏡の奥で片目を光らせながら、震える声で言った。「どうしてわかったのです、私が外貨を持っていないなどと？身なりで判断するのですかね？そんなことは二度としちゃいけないね、親愛なる守衛さん！間違いをしでかすことになるよ、しかも重大な間違いを。…」)

しかしながらопоздать (遅れる)については(24)のように許可のモダリティーも表現されることが示されており、また次の(25)、(26)など他の動詞の場合でも可能のモダリティーが表現される例も観察される。

- (24) — Я приду на заседание кафедры после лекции, поэтому, возможно, я немного опоздаю. — Ничего страшного, можете опоздать. (Караванов 2004:134-135)

(「会議には講義後に行きますから多分少し遅れます」「大丈夫、遅れてもかまいませんよ」)

- (25) Через четверть часа Рюхин, в полном одиночестве, сидел, скорчившись над рыбцом, пил рюмку за рюмкой, понимая и признавая, что исправить в его жизни уже ничего

нельзя, а можно только забыть.

«Мастер»

(15分後に、リューヒンは完全にひとりぼっちで、小魚の皿の上にかがみこむようにしてすわり、ウォトカのグラスをたてつづけに空けながら、自分の人生でやり直せるものはもはやなにひとつない、可能なのは忘れることだけなのだ、とはっきり悟った。)

(26) ...Кадровик может "забыть", что на твое личное дело пришел запрос из вышестоящей организации, куда тебя хотят взять на работу, более интересную и с повышением в должности и в зарплате, или "потерять" этот запрос, ...

«Сон»

(…人事担当者は、上部機関からのあなたの個人ファイル宛に、昇給と給与の増額を伴う、今よりもおもしろい仕事への採用打診があったことを忘れることもできるし、その打診書を紛失することもできる。…)

(25), (26) のзабыть, потерятьは明らかに [+意志性] 指標を示しており、<можно (мочь) +不定詞>構文で可能・許可/危惧のいずれのモダリティーがイメージされるかには、どうも動作様態としての [瞬間性] よりも [意志性] 指標が関与しているようである。

さらにはインフォーマント調査で、先にみたопоздать以外の動詞でも、次のような状況では許可のモダリティー表現が十分可能であることも指摘されている。

(27) Чувствуйте себя, как дома! Можете пролить чай на скатерть, можете испачкать диван шоколадом — скатерть постираем, диван почистим!

([遠慮しているこどもの客に対して]「おうちと同じようにしていいのよ！ テーブルクロスにお茶をこぼしたって、ソファをチョコレートで汚したっていいのよ。テーブルクロスは洗えばいいし、ソファは拭けばいいんだから！)」

(27) のпролить (こぼす), испачкать (よごす) では先の (25), (26) の場合とも異なり、[-意志性] 指標は保たれたままで許可のモダリティーが表現されている。ここでは動作の結果に対して——所有者が異なる等の理由で——動作主自身は直接の被害を被らないといった状況が関係しているであろう。いずれにせよмочь (можно)+完了体・不定詞においていかなるモダリティーが表現されるのかという問題には、文脈・発話を取りまく状況が深く関与しており、単なる [瞬間性], [意志性] といった指標のみでは決定できないということがわかる。

ところでмочь (можно)+動詞・不定詞で危惧を表現する場合、一律、完了体が選択されるについては、林田 (2007:140-150) でふれた完了体・人称変化形における可能性/不可能性、予想といったモダリティー表現機能によって説明が可能である。AOTコーパス検索でも、文脈によっても可能・許可のモダリティーが表現困難と思われる——従ってもっぱら危惧のモダリティーを表出すると思われる——ушибаться - ушибиться (うっかりぶつけてけがをする) простужаться - простудиться (かぜをひく) 等の動詞ではмочь (можно)+完了体・不定詞の例は観察されない⁹⁾。

9) コーパス検索では単語間スペースを2以内 (すなわちмочь (можно) と動詞間に2単語までは入ることを許容する条件) で設定した。

3.4.2 「瞬間動詞」不完了体・不定詞

- (28) — ... Ведь я нюх начал терять в этом доме. Я все думаю: чего Мишель ждет? Ну чего он ждет? Ну чего он легавую свою на след не наводит?.. Ты мне не верил!

«Похождения»

(この家において、俺ア鼻が鈍りだしてたところよ。いつだって思ってたぜ、ミシエルは何を待ってるんだろう？ 一体何を待ってるんだろう？ 何で自分の猟犬を差し向けて跡を追わせないんだらうってさ…俺を信じなかったんだからな！)

- (29) ... В тот же момент что-то сверкнуло в руках Азазелло, что-то негромко хлопнуло как в ладоши, барон стал падать навзничь, алая кровь брызнула у него из груди и залила крахмальную рубашку и жилет.

«Мастер»

(その瞬間、アザゼッロの手の中でなにかがきらりと閃き、手をたたくみたい鈍い音がし、男爵は仰向けに倒れかかり、まっかな血が胸から噴き出し、糊の利いたワイシャツやチョッキにあふれた。)

先に、「瞬間動詞」は位相動詞 *начать, стать* 等と共に起しがたいという Апресян (1988:65) の指摘をみたが、分析データ中では上記の (28), (29) のように *начать, стать* 等の位相動詞と結合する不完了体・不定詞が多く観察された。この事実もまた、「瞬間動詞」に分類される動詞群の構文上のふるまい、イメージ形成における不均質性を物語っている。「瞬間動詞」不完了体が位相動詞と共に起するのは (28), (29) の *начал терять, стал падать* のように、多くの場合、「事態変化への接近」あるいは事態変化そのもののプロセス (3.3.2—不完了体現在・過去参照) がその開始相という形で表現される場合である。

分析データ中で観察された「瞬間動詞」不完了体・不定詞の用法は上記の例以外では次のようなものがみられた。

- (30) «Уронить вилку? Нет, лучше поперхнуться. Не надо переигрывать. Глупо с первого же слова ему верить и ударяться в панику.»

«Игра»

(《フォークでも取り落とそうか。いいえ、むせる方が良さそうね。大げさな芝居は良くないわ。最初からこの人の言うことを信じてパニックに陥るのはばかげている》)

- (31) Чтобы не терять времени даром, я прыгнул вперед сразу на миллион лет. Над стеной выросли заросли атомных грибов, и я обрадовался когда по мою сторону стены снова забрезжил свет.

«Понедельник»

(時間をむだにしたくなかったので、一挙に百万年先へジャンプした。そこでは壁の上空に茸のような原子雲が茂みのように密生していた。)

- (32) Спасибо, надоумила соседка по общежитию для иногородних: подать в технический. В университет сдают в июле, а туда в августе. Расторопная, не первый раз поступает, говорит: главное — не падать духом.

«Кафедра»

(地方出身者用の寮の相部屋の子が、ありがたいことに技術大学に志願するよう知恵

を授けてくれた。総合大学は7月試験だけど、そこは8月なのだ。機転が利いて一度ならず受験もしたことがある彼女が、大事なのがたっぷりしないことだと言う。）

(30), (31) では「否定的評価」「忌避」「非願望」が、(32) では「不必要」「禁止」のモダリティーが表現されている。いずれも「瞬間動詞」に限らず不完了体一般に観察される用法であるが、ここでも体の選択にモダリティーの表現意図が第一義的に関与していることがわかる。

3.4 「瞬間動詞」未来、命令法

最後に未来、命令法について紙面に限りもあるので簡単にだけふれたい。

- (33) Анюта дрожащею рукой закинула крючок, причем исчез двор, а полосы из кухни исчезли оттого, что пальто Мышлаевского обвило Анюту и очень знакомый голос шепнул: — Здравствуйте, Анюточка... Вы простудитесь... А в кухне никого нет, Анюта? «Гвардия»

(アニュータが震える手で掛け金を下ろすと、中庭は消え、台所からの光のしまは、ムィシュラエフスキイの外套がアニュータをくるみ、聞き覚えのある懐かしい声のささやきで消えた。「やあ、アニュータ…きみ風邪をひくよ…で台所には誰もいないの、アニュータ?」)

- (34) — Сейчас из достоверных рук узнал, — ответил буфетчик, одичало поглядывая на какую-то фотографическую группу за стеклом, — что в феврале будущего года умру от рака печени. Умоляю остановить. «Мастер»

(「今信頼すべき筋から知らされたのですが」ガラスの向こうにあった何枚かの写真を異様な目つきで見ながら、ビュッフエ主任は答えた。「来年の二月に、わたしは肝臓癌で死ぬそうです。どうかお願いします、助けてください」)

資料中、分析対象である「瞬間動詞」未来の用例は完了体62例、不完了体8例の計70例であった。まず完了体のうち54例が限界達成からの派生的意味として、事態生起の客観的な成否としての可能性／不可能性、不可避性、予想といったモダリティーを表示している。(33)は可能性の、(34)は不可避性のモダリティー表示の例である。

一方、不完了体8例中4例は反復動作を示している。残り4例は以下の(35)のように否定を伴うことによって「～しないでおこう」という忌避の表現となっており、不完了体・未来による意志性のモダリティー表現につながる内容となっている。

- (35) — Не будем терять время. На очередном заседании вам будет предоставлено слово. «Кафедра»

(「時間を無駄にしないでおきましょう。定例会議であなたの発言は取り上げますから」)

未来においてアスペクトの意味・機能の中心的役割を担うのは話者のモダリティー表示機能であり、その表現形式成立の歴史的経緯が影響することで完了体・未来→可能／不可

能、予想、不可避、不完了体・未来→意志性というモダリティー表現上の分化が行なわれているという点はすでに林田 (2007:52-54, 140-155) でも述べた。「瞬間動詞」にあっても基本的枠組みにおいては話者のモダリティー表示が体決定の中心的モメントになっているといえるだろう。ただし、完了体の残り8例——すべてзабытьの例であるが——については以下のように意志性表現という理解も成立しそうである。このあたりはどうも同じ「瞬間動詞」であっても不完了体・未来で意志性表現が可能な動詞とそうでないものがあるという事情が関わっているようであるが、それについてはより詳細な検討が必要であり今後の分析の課題としたい。

- (36) ... Если завтра сюда никто не придет, я буду считать, что сегодняшнего разговора не было, и забуду о нем навсегда. «Игра»

(もし明日誰も来なければ今日の会話はなかったことにして、永久に忘れることにします。)

命令法においても[意志性]指標が体決定に緊密に関わってくる。

2.3) で偶然の非意志的動作を表す動詞群は否定命令文で完了体が使用され、警告のモダリティー表現になるという点を見た。資料中の否定命令文は44例であったが、表1中にみる不完了体・命令文24例はそのすべてが否定命令文であり、実に半数以上の否定命令文で不完了体が使用されているということになる。

- (37) Он вдруг понял, что насильно отталкивается от Павора. Это же чиновник, не забывай. У него по определению не может быть идейных соображений ... «Лебеди»

(彼はふと自分がパヴオルを毛嫌いしていることに気がついた。やつは役人じゃないか、そこを忘れるなよ。やつはまともな思想的判断なんて持ち合わせていないんだ。…)

- (38) "Борька, не забудь, что второго ноября у Лысакова сорокалетие. Если ты его не поздравишь, он смертельно обидится..." «Сон»

(《ボリス、11月2日がルイサコフの40歳の誕生日だっていうこと、忘れちゃだめだぜ。祝ってやらなきゃ一生恨まれるぜ…》)

(37), (38) のように異なる体が使用されている例を比べてみると、結局のところ命令法においても問題となる動作に意志性が関与し得るかどうか体が決定に影響を与えているようである。すなわち警告のモダリティー表現とは、起こる可能性が十分にありそうだと予想されること、その意味で意志性が関与し難い事柄について、「どうか起こらないように」という話者の祈念・願望を表現する場合であるといえるだろう。一方、不完了体が使われる否定命令文では、事態は事前に阻止することが可能である、すなわち意志でもって回避し得ると話者が認識している場合に、「～しないように」という禁止のモダリティーが表現され、それは [+意志性] 指標をもつ動詞一般に観察される否定命令の用法につながるものとして理解できるのである。

4. まとめ

本論は、従来から「瞬間動詞」として括られてきたロシア語動詞群のアスペクト的意味・機能の実相を明らかにすることを目的としていた。大量の実資料の分析・考察を通して

1) それら動詞群に含まれる各動詞は、感情表出や実況放送型など「内部記述」に基づく特殊な現在用法、静的状態、事態予想、事態変化プロセスなど、とりわけその不完了体において特徴的な多様なアスペクト的意味・機能をみせること、2) 同一動詞の同一語彙素であっても文脈・発話状況等の関与によってそれらの意味・機能は異なりをみせること、3) 不定詞における体の選択には話者のモダリティーの表現意図が第一義的に関与しており、またここでも文脈・発話を取りまく状況によって同一の表現形式がさまざまにそのモダリティー内容を変化させている、といった点が明らかになったことと思う。

紙面の都合上、命令法、未来については基本的な枠組みの提示にとどまっている。より詳細な分析を今後の課題としたい。

参考文献

- Апресян, Ю.Д. 1988. Глаголы моментального действия и перформативы в русском языке // *Русистика сегодня. Язык: система и ее функционирование*. М.
- Бондарко, А.В. 1971. *Вид и время русского глагола*. М.
- Булыгина, Т.В. К построению типологии предикатов в русском языке // *Семантические типы предикатов*. М.
- Гиро-Вербер, М. 1990. Вид и семантика русского глагола // *Вопросы языкознания*. № 2.
- Гловинская, М.Я. 1982. *Семантические типы видовых противопоставлений русского глагола*. М.
- Гловинская, М.Я. 2001. *Многозначность и синонимия в видо-временной системе русского глагола*. М.
- 林田 理恵. 2000. 「ロシア語における「主語」と「主題」そして「主体」について—(3) 受動構文」『大阪外国語大学論集』第22号.
- 林田 理恵. 2003. 「ロシア語のアスペクトと視点, 内部記述/外部記述—不完了体<一般的事実>の意味を中心に—」『ロシア・東欧研究』第7号.
- 林田 理恵. 2007. 『ロシア語のアスペクト』南雲堂フェニックス.
- Караванов, А.А. 2004. *Виды русского глагола: значение и употребление*. М.
- 金田一 春彦. 1950. 「国語動詞の一分類」(『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房 1976に所収).
- 金田一 真澄. 1994. 『ロシア語時制論—歴史的現在とその周辺』三省堂.
- Климов, Г.А. 1977. *Типология языков активного строя*. М.
- クリモフ, G.A. 1999. 『新しい言語類型学』(石田修一訳) 三省堂.
- Kučera, H. 1985. “Aspect in Negative Imperatives” in *The scope of Slavic aspect*. Columbus, Ohio: Slavica Publishers.

- 工藤 真由美. 1995.『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房.
- Маслов, Ю.С. 1948. Вид и лексическое значение глагола в современном русском литературном языке // *Изв. АН СССР. Сер. лит. и яз.* Т.7, № 4.
- Маслов, Ю.С. 1983. Результатив, перфект и глагольный вид // *Типология результативных конструкций.* Л.
- Маслов, Ю.С. 1984. *Очерки по аспектологии.* Л.
- Мелиг, Х.Р. 1985. Семантика предложения и семантика вида в русском языке (к классификации глаголов Зино Вендлера) // *Новое в зарубежной лингвистике.* Вып. XV. М.
- 三原 健一. 1997.「動詞のアスペクト構造」『ヴォイスとアスペクト』研究社出版.
- 三原 健一. 2004.『アスペクト解釈と統語現象』松柏社.
- 奥田 靖雄. 1977.「アスペクトの研究をめぐって—金田一的段階」(『ことばの研究・序説』むぎ書房 1985に所収) .
- Падучева, Е.В. 1986. Семантика вида и точка отсчета // *Изв. АН СССР. Сер. лит. и яз.* Т.45, № 5.
- Падучева, Е.В. 1989. К поискам инварианта в значении глагольных видов: вид и лексическое значение глагола // *Научно-техническая информация, сер. 2, № 12.*
- Падучева, Е.В. 1996а. Вид лексическое значение глагола // *Семантические исследования.* Ч.1. *Семантика времени и вида в русском языке.* М.
- Падучева, Е.В. 1996б. Семантика видового противопоставления и таксономическая категория глагола // *Семантические исследования.* Ч.1. *Семантика времени и вида в русском языке.* М.
- Падучева, Е.В. 1998. Семантические источники моментальности русского глагола в типологическом ракурсе // *Типология вида: проблемы, поиски, решения.* М.
- Рассудова, О.П. 1968. *Употребление видов глагола в русском языке.* М.
- Шагуновский, И.Б. 1996. *Семантика предложения и неререферентные слова.* М.
- 須田 義治. 2003.『現代日本語のアスペクト論』海山文化研究所.
- Timberlake, A. 1985. “Reichenbach and Russian aspect,” in *The scope of Slavic aspect.* Columbus, Ohio: Slavica Publishers.
- Vendler, Z. 1967. “Verbs and Times” in *Linguistics in philosophy.* Ithaca, N.Y.
- 山口 巖. 1995.『類型学序説』京都大学学術出版会.

例文出典

- Айтматов, Ч. *Первый учитель*. Киев, 1976. «Учитель»
- アイトマトフ, Ch. 『最初の教師』(赤沼弘訳) 第三文明社, 1990.
- Булгаков, М. *Белая гвардия*. М., 1989. «Гвардия»
- ブルガーコフ, М. 『白衛軍』(中田甫・浅川彰三訳) 群像社, 1993.
- Булгаков, М. *Мастер и Маргарита*. М., 1988. «Мастер»
- ブルガーコフ, М. 『巨匠とマルガリータ』(水野忠夫訳) 集英社, 1977.
- Рекова, И. *Кафедра*. <http://lib.ru/> «Кафедра»
- グレーコフ, I. 『大学教師』(前田勇訳) 群像社, 1988.
- Ерофеев, В. *Русская Красавица*. <http://lib.ru/> «Красавица»
- エロフエーエフ, V. 『モスクワの美しいひと』(千種堅訳) 河出書房新社, 1992.
- Маринина, А. *Игра на чужом поле*. <http://www.allbest.ru/> «Игра»
- マリーニナ, А. 『アウエイ ゲーム』(貝澤哉訳) 光文社文庫, 2003.
- Маринина, А. *Украденный сон*. <http://www.allbest.ru/> «Сон»
- マリーニナ, А. 『盗まれた夢』(吉岡ゆき訳) 作品社, 1999.
- Окуджава, Б. *Похождения Шипова, или Старинный водевиль*. <http://lib.ru/> «Похождения»
- オクジャワ, В. 『シーポフの冒険 あるいは今は昔のボードビル』(沼野充義・沼野恭子訳) 群像社, 1989.
- Распутин, В. *Живи и помни*. <http://lib.ru/> «Живи»
- ラスプーチン, V. 『生きよ, そして記憶せよ』(原卓也・安岡治子訳) 講談社, 1980.
- Стругацкие, А. и Б. *Понедельник начинается в субботу*. М., 1992. «Понедельник»
- ストルガツキイ, А.&V. 『月曜日は土曜日に始まる』(深見弾訳) 群像社, 1989.
- Стругацкие, А. и Б. *Гадкие лебеди*. <http://lib.ru/> «Лебеди»
- ストルガツキイ, А.&V. 『みにくい白鳥』(中沢敦夫訳) 群像社, 1989.

(行末の《 》内は本文中に記載した出典表示を示す。また邦訳については本文中の日本語訳の参考としているが、誤訳、分析に支障のある意識に関しては適切な内容に随時変更している。)